

「私たちのただ中に」
(ヨハネの福音書1章14節～18節)

牧師：原 雅幸

序) クリスマスは旅の物語

- ・マリアとヨセフ、博士たちは旅をした。羊飼いは常に旅暮らしだった。
- ・聖書が私たち人間の生き様を旅になぞらえていることを反映している。
- ・2020年という荒野を旅してきた私たちも今年限りのクリスマスを迎える。

1) クリスマスを目指す神の旅

- ・「ことば」は神であり、世界に光を与え、人にいのちと悟りを与える。この方に背を向ける時、闇が生まれ、罪と死と愚かさが覆う。
- ・神は預言者たちを通して、ずっと語ってこられたが、ついに時満ちて、神のことば自身が人となって現れた。神の定義を踏み越えて来てくださったのが、クリスマスである。
- ・私たちが、神のことばをよりはっきり受け取ることができるために。

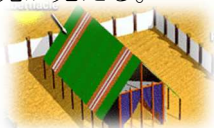


2) 約束の地を目指す神の旅

- ・「住まれた」…「テントを張った」という言葉。シナイ山のふもとで造られた神の幕屋を思い起こさせる。約束の地を目指すイスラエルの旅は、罪と死の支配する闇の世界から、神の愛の光へと脱出する旅に重なる。
- ・主イエスは、この旅を共に歩んでくださるために人となられた。
- ・神のテントが一致の要となり、民は一つの民として形づくられていった。

3) クリスマスから始まる新しい旅

- ・人と人之間「私たちの間(ただ中)」にテントを張られたことの意味：
→「神は私と共に」ではなく「私たちと共に(インマヌエル)」
- ・古代人は、このテントを鷲が翼を広げて雛を守る様子になぞらえた。
- 現代人には、大きな絆創膏のイメージが役立つかもしれない。
- ・人と人之間に、破れが生じる時こそ、主イエスがテントを張るように臨在してくださることを信じ仰ぐこと。
- ・人は自分の罪深さはわかりにくく、他人の罪はよく見える。しかしその人との間に主が来られると、自分の醜さがわかるようになる。それは苦しいことだが、そこで主を仰ぐなら、神のひとり子の栄光が見える。
- ・私たちのただ中にテントを張るために来られた主イエスは、引き裂かれる覚悟をもって臨んでくださった。



結) 「ベツレヘム」にとどまることなく、旅を志す者へ

- ・クリスマスが、ただの行事ではなく、新しい出発の時となるように。

◆お話を聞きながら、答えを考えましょう。

① クリスマスに関係する旅のことをまとめましょう。

マリアとヨセフ：ナザレ→ベツレヘム→()→()

羊飼いは：野原→()→野原

博士たち：東の国→()→ベツレヘム→自分の国

イエスさま：神さまのところ→()の間→完全な世界へ

② ヨハネの福音書に出てくる「ことば」とは、誰のことですか。

人になる前の、

_____のこと

③ 人と人が、直接会えないと、困ることは何でしょうか。



④ イエス様が、人になったのは、今日のお話によると、何のためですか。

◆お話を聞いた後で、考えましょう。

⑤ あなたのまわりの人間関係で、間にイエス様に来てもらうほうがよいのは、特にどこでしょうか。

⑥ イエスさまが「私」と一緒にいるのと「私たち」と一緒にいるのでは、どう違いますか。

